

看護学生が持つ子どものイメージとそれらに関連する要因

末永 香¹⁾・中山 静和¹⁾

【要旨】

本研究の目的は、看護師養成所の3年課程に所属する看護学生のもつ子どものイメージとそれらに関連する要因を明らかにすることであった。千葉市内の看護師養成所3年課程の学生38名を対象に、小児看護学の授業開始前に質問紙調査を行った。調査内容は、7段階評価で子どものイメージを測定する28項目の質問紙と、それらに関連すると考えられる学生の背景についてであり、データはすべて統計的に分析した。因子分析の結果から4因子が抽出され、学生は子どもに対して肯定的なイメージを持っていること、また、子どもへの関心や子どもの世話への関心が高い学生ほど、子どもに対して肯定的なイメージを持っていることが明らかとなった。これらの結果より、子どもへの関心や子どもの世話への関心を育むために、小児看護学の授業や演習において視聴覚教材の活用や、実際に社会にいる子どもと関わる機会を増やす必要性が示唆された。

キーワード：子ども、イメージ、看護学生、要因

I. はじめに

少子化が進行する中、人が成長していく過程で自分よりも小さい子どもと接する機会が非常に少なくなっている。文部科学省の中央教育審議会報告「少子化と教育について」(2000)において、昭和30年では地域社会に住む大人100人に対し子ども50人を育てていた計算になるが、平成11年では、わずか17人を育てている計算になる、とある。

筆者は学生に小児看護学を教授する中で、学生の子どものに接する機会が減少していることや、学生のもつ子どものイメージが、実際の子どものかけ離れていることは感じてきた。看護学生が子どもに対して持つイメージについて最上ら(1998)は「学生が子どもをどのように捉えどう接するかは、子どもに対するイメージに影響され、そのイメージは、生育過程や過去の子どもの接触経験などの総合的結果としてできあがり、小児看護学での講義や実習を通して変化する」と述べている。

千葉市内にあるA看護学校は、3年課程の学生においても約40%が社会人経験のある入学生であり、育児経験をもつ学生も多い。一方で、子どもと触れ合う経験も少なく、高校を卒業してすぐに看護学校に入学して小児看護を学ぶ学生もあり、学生の背景が様々である。

¹⁾ 城西国際大学看護学部看護学科

このような背景の幅広い学生に対し、3 年間で効果的に小児看護学の学習支援をするため、学生の背景等を把握した個別性のある関わりが必要であると考え。そのためには、まず学生のもつ子どものイメージが、学生の背景や子どもとの接触体験などによりどのように異なるのかを把握する必要があると考えた。今後の小児看護学の教授方法を検討するために本研究を実施した。

Ⅱ. 目 的

本研究の目的は、以下のとおりである。

1. 看護学生が子どもに対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにする。
2. 看護学生のもつ子どものイメージと、学生の背景や子どもへの関心、これまでの子どもとの接触体験、接することへの不安などの要因とどのように関連しているかを明らかにする。

Ⅲ. 方 法

1. 調査対象

千葉市内の A 看護学校(3 年課程)の看護学生 38 名

2. 調査方法

(1) 調査項目

調査対象に対するアンケート調査については、以下の調査内容、および質問紙を用いて実施した。

① 子どもに対するイメージについての質問紙

子どもに対するイメージの評価には、高橋ら(2000)の研究を参考に抽出した 28 項目の形容詞対を用いた。各項目は否定的イメージ(1 点)から肯定的イメージ(7 点)まで 7 段階に分け、得点化した。

② 子どものイメージに影響を与えると考えられる要因について

学生の背景やこれまでの子どもとの接触体験、子どもへの関心、子どもの世話への関心、子どもに接する不安など子どものイメージに影響を与えると考えられる要因についても合わせて調査した。

(2) 調査期間

平成 22 年 9 月

(3) 調査時期

調査の時期は、学生が入学後小児看護概論の授業が開始される前(1 年次後期)であった。

3. 分析方法

調査によって得られたデータは、すべて統計パッケージ SPSS for Windows ver.20 を使用して統計的に処理し分析した。

子どもに対するイメージの 28 項目については、因子分析(バリマックス回転)を行うと共に、クロ

ンバック α を算出した。さらに、学生の背景による子どものイメージの違いに関して、一元配置分散分析やt検定を用いて有意差の検定を行った。

IV. 倫理的配慮

学生には、調査開始前に研究の目的と意義、調査への協力の依頼、倫理的な配慮について、口頭と書面をもって説明し、承諾書に署名を得た。また、調査途中で協力を中止する場合にも不利益を被らないこと、学業成績には影響がないことを説明した。調査によって得られたデータは、個人が特定されないように全て統計的に処理をした。

本研究は、A看護学校の倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

V. 結 果

1. 対象の背景

本研究の調査への協力が得られた学生は、38名中35名(92.1%)であった(表1)。

表1 対象学生の背景

		人	(%)
性別	男	3	(8.6)
	女	32	(91.4)
年代	10歳代	22	(62.9)
	20歳代	2	(5.7)
	30歳代	9	(25.7)
	40歳代	2	(5.7)
家族形態	核家族(自分と子)	5	(14.3)
	核家族(自分と親)	22	(62.9)
	拡大家族	7	(20.0)
	単身世帯	1	(2.9)
同胞数	1人	4	(11.4)
	2人	22	(62.9)
	3人	7	(20.0)
	4人以上	2	(5.7)
出生順位	第1子	21	(60.0)
	第2子	10	(28.6)
	第3子	3	(8.6)
	第4子以降	1	(2.9)
入学以前の就業経験	なし	6	(17.6)
	あり	28	(82.4)
	正職員	12	
	アルバイト	16	

学生の年代は、10歳代が最も多く22名(62.9%)、20歳代が2名(5.7%)、30歳代が9名(25.7%)、40歳代が2名(5.7%)であり、家族形態は、自分と子どもの核家族が5名(14.3%)、自分と親の核家族が22名(62.9%)、拡大家族が7名(20%)、単身世帯が1名(2.9%)であった。

学生を含む同胞数は、1人(一人っ子)が4名(11.4%)、2人が22名(62.9%)、3人が7名(20%)、4人以上が2人(5.7%)であり、同胞の中での学生の出生順位は、第1子は21名(60%)、第2子が10名(28.6%)、第3子が3名(8.6%)、第4子以降が1名(2.9%)であった。

看護学校入学以前の就業経験は、経験なしが6名(17.6%)、経験ありが28名(82.4%)で、そのうち正職員を経験しているものが12名、アルバイトの経験が16名であった。

子どもとの接触体験については、多いが9名(25.7%)、それなりにあるが7名(20%)、少しあるが13名(37.1%)、あまりないが6名(17.1%)であった(図1)。学生の年代による子どもとの接触体験の多さが、「多い～それなりにある」としたものが10歳代で36.4%であったのに対し、20歳代で50%、30歳代で55.6%、40歳代で100%と、年代を追う毎に割合が高くなっていった。

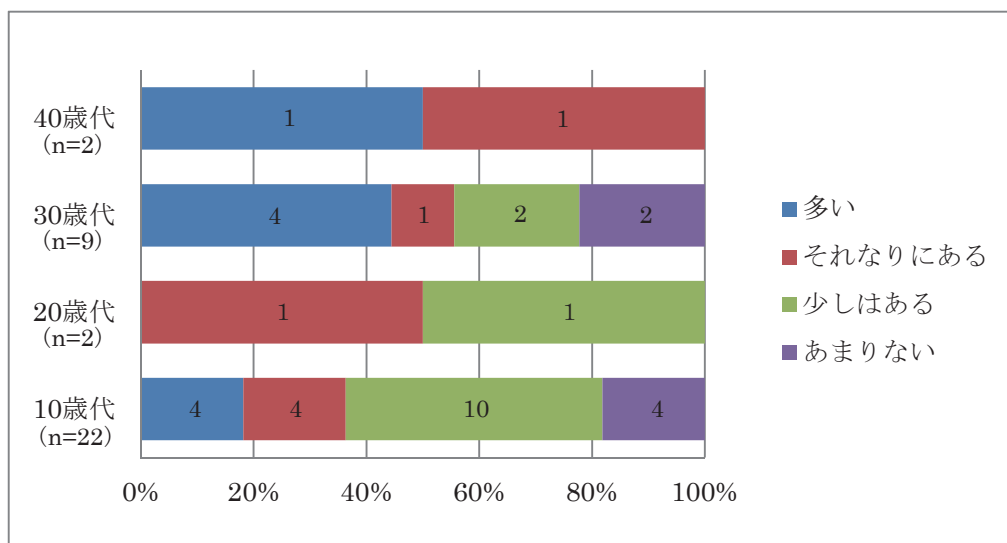


図1 学生の年代による子どもとの接触体験の頻度

学生が関わった子どもの年代や子どもとの関係、関わりの内容について、複数回答で尋ねた(表2)。

関わった子どもの年代は、幼児前期が13名(37.1%)、幼児後期が15名(42.9%)と幼児期が多く、乳児期が8名(22.9%)と最も少なかった。関わった子どもとの関係では、近所の子の8名(22.9%)やボランティア活動・職業体験、保育所の子、生徒の13名(37.1%)など学生との血縁関係の遠い子どもの方が、弟妹の4名(11.4%)や甥姪の4名(11.4%)、いとこの3名(8.6%)、親戚の子の4名(11.4%)など血縁関係が近い子どもよりも多かった。関わりの内容では遊び26名(74.3%)が最も多く、次いで抱っこ・おんぶ21名(60.0%)、寝かしつけ8名(22.9%)の順に多く、清潔の世話1名(2.9%)やおむつ交換2名(5.7%)は少なかった。

表 2 学生が関わった子どもの背景(複数回答)

		人	(%)
関わった子どもの年代	乳児期	8	(22.9)
	幼児前期	13	(37.1)
	幼児後期	15	(42.9)
	学童期	9	(25.7)
	思春期	9	(25.7)
関わった子どもとの関係	弟妹	4	(11.4)
	自分の子	6	(17.1)
	甥姪	4	(11.4)
	いとこ	3	(8.6)
	親戚の子	4	(11.4)
	近所の子	8	(22.9)
	その他	13	(37.1)
	(ボランティア、職業体験、保育所の子、生徒など)		
子どもとの関わりの内容	おむつ交換	2	(5.7)
	食事の援助	7	(20.0)
	清潔の援助	1	(2.9)
	抱っこ・おんぶ	21	(60.0)
	寝かしつけ	8	(22.9)
	遊び	26	(74.3)

2. 子どもに対するイメージの因子分析

子どもに対するイメージ項目 28 対について因子分析を行った結果、初期固有値 1.00 以上、因子負荷量の絶対値が 0.4 以上を採択すると、累積寄与率 56.3%で 4 つの因子を抽出することができた(表 3)。内部一貫性を示すクロンバック α は 0.897 であった。

イメージ項目の平均得点はすべて 4.0 点以上であり、最高は「可愛いー憎い」の 6.58 点、最低は「たくましいー弱弱しい」の 4.09 点であった。

第 1 因子として抽出された項目は「触れたい、抱っこしたい、守りたい、子どもと遊びたい、好き、子どもと話したい、遊びが大好き、きれい、みずみずしい」の 9 項目であり、これらは『子どもとの接触願望』を示していると考えられた。第 2 因子は「素直、正直、心がきれい、好奇心、純粋、無邪気、面白い、可愛い」の 8 項目で、これらは『子どもの内的側面に関連しているもの』と考えられた。第 3 因子として抽出された因子は「丸い、ぼちゃぼちゃ、柔らか、暖かい」の 4 項目であり、『子どもの外観に関連するもの』であった。第 4 因子は「明るい、楽しい」の 2 項目で、『子どものもつ雰囲気をつ捉えたもの』であった。

表3 子どものイメージ項目別の得点および因子別負荷量

n=35

イメージ項目	得点		因子別負荷量			
	平均	標準偏差	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
〈子どもとの接触願望に関連する因子〉						
触れたいー触れたくない	5.76	1.56	0.980			
抱っこしたいー抱っこしたくない	5.70	1.36	0.866			
守りたいー守りたくない	5.91	1.33	0.837			
子どもと遊びたいー遊びたくない	5.70	1.51	0.820			
好きー嫌い	6.18	1.36	0.799			
子どもと話したいー話したくない	5.73	1.44	0.767			
遊びが大好きー遊びが大嫌い	6.18	1.07	0.482			
きれいー汚い	4.85	1.25	0.463			
みずみずしいーかさかさした	6.12	0.99	0.412			
〈子どもの内的側面に関連する因子〉						
素直ーひねくれ	5.97	1.16		0.852		
正直ー嘘つき	5.94	1.14		0.805		
心がきれいー心が汚い	5.91	1.16		0.770		
好奇心ー無関心	6.36	0.82		0.704		
純粋ー不純	6.21	1.05		0.633		
無邪気ー作為的	6.39	0.79		0.603		
面白いー面白くない	6.03	1.02		0.566		
可愛いー憎い	6.58	0.75		0.481		
〈子どもの外観に関連する因子〉						
丸いーとがった	5.61	1.25			0.827	
ぽちゃぽちゃーごつごつ	5.67	1.19			0.797	
柔らかー固い	6.15	1.15			0.769	
暖かいー冷たい	5.55	1.23			0.702	
〈子どものもつ雰囲気をつえた因子〉						
明るいー暗い	5.76	1.12				0.761
楽しいー楽しくない	5.97	1.13				0.700
全項目総得点	161.2	17.86				
累積寄与率(%)			21.147	37.061	48.051	56.357

因子分析(バリマックス回転)

クロンバック $\alpha=0.897$

3. 子どもへの関心や子どもの世話への関心、子どもに接することへの不安による子どものイメージの比較

子どものイメージ総得点を、子どもへの関心、子どもの世話への関心、子どもに接することへの不安についてt検定を用いて比較した(表4)。その結果、子どもへの関心がある学生はない学生よりも、

子どものイメージ総得点が有意に高かった($t=3.723, df=28, p<0.01$)。また、子どもの世話への関心がある学生は関心がない学生よりも($t=3.597, df=28, p<0.01$)、子どもの世話への関心がどちらともいえない学生は関心がない学生よりも($t=2.836, df=5, p<0.05$)、子どものイメージ総得点が有意に高かった。子どもに接することへの不安については、子どものイメージ総得点に差が認められなかった。

表 4 子どものイメージ総得点と子どもへの関心、世話への関心、接することへの不安との関連

		子どものイメージ総得点			
		n	平均	標準偏差	
子どもへの関心	ある	28	163.9	15.0	**
	どちらともいえない	5	160.8	20.9	
	ない	2	123.5	7.8	
子どもの世話への関心	ある	28	163.4	15.3	**
	どちらともいえない	5	164.2	18.8	
	ない	2	123.5	7.8	
子どもに接することへの不安	ある	15	157.4	21.7	*
	どちらともいえない	9	164.8	13.3	
	ない	11	163.8	15.8	
t 検定					* $p<0.05$ ** $p<0.01$

次に、因子分析で見いだされた各因子の得点を、子どもへの関心、子どもの世話への関心、子どもに接することへの不安により一元配置分散分析を用いて比較した(表 5)。結果、子どもへの関心は第 1 因子の『子どもとの接触願望に関する因子』について有意であった($F(2,32)=18.763, p<0.001$)。TukeyHSD を用いた多重比較によれば、子どもへの関心がある学生やどちらともいえない学生は、関心がない学生よりも第 1 因子が有意に高かった。また同様に、子どもの世話への関心も第 1 因子に関して有意であった($F(2,32)=16.170, p<0.001$)。TukeyHSD を用いた多重比較によれば、子どもの世話への関心がある学生やどちらともいえない学生は、関心がない学生よりも第 1 因子が有意に高かった。子どもに接することについての不安は、因子分析の各因子の得点との関連はみられなかった。

4. 学生の背景による子どものイメージの比較

子どものイメージ総得点を、学生の年代、学生自身を含む同胞数、出生順位、家族形態、就業経験の有無、子どもとの接触体験の多さ、関わった子どもの年代、子どもと関わった内容により比較したが、いずれも有意差は認められなかった。

次に、因子分析で見いだされた各因子の得点を、学生の背景により t 検定を用いて比較した(表 6)。学生の背景により差が認められたものは、弟妹との接触体験の有無と、姪甥との接触体験の有無のみであった。弟妹との接触体験において、体験がない学生がある学生よりも第 2 因子の『子どもの内的側面に関する因子』の得点が高かった($t=2.335, df=31, p<0.05$)。甥姪との接触体験については、体験ある学生がない学生よりも第 2 因子の『子どもの内的側面に関する因子』の得点が有意に高く($t=-5.536, df=30.036, p<0.001$)、第 4 因子の『子どものもつ雰囲気をつ捉えた因子』の得点が有意に高

かった ($t=-5.413, df=20.547, p<0.001$)。

表 5 因子分析の各因子と子どもへの関心、子どもの世話への関心、子どもに接することへの不安との関連

子どもへの関心		n	M	SD	
「子どもとの接触願望 に関連する因子」	ある	28	54.2	6.62	*** ***
	どちらともいえない	5	48.4	8.73	
	ない	2	24.0	4.24	
「子どもの内的側面に 関連する因子」	ある	28	50.2	5.55	
	どちらともいえない	5	46	9.06	
	ない	2	44	5.66	
「子どもの外観に 関連する因子」	ある	28	22.4	4.11	
	どちらともいえない	5	25.4	3.21	
	ない	2	22.5	3.54	
「子どものもつ雰囲気 を捉えた因子」	ある	28	11.8	1.77	
	どちらともいえない	5	12	3.39	
	ない	2	10.5	3.54	
子どもの世話への関心		n	M	SD	
「子どもとの接触願望 に関連する因子」	ある	28	35.7	7.44	*** ***
	どちらともいえない	5	51.4	5.32	
	ない	2	24	4.24	
「子どもの内的側面に 関連する因子」	ある	28	49.8	5.51	
	どちらともいえない	5	48.2	10.03	
	ない	2	44	5.66	
「子どもの外観に 関連する因子」	ある	28	22.7	4.11	
	どちらともいえない	5	23.6	4.39	
	ない	2	22.5	3.54	
「子どものもつ雰囲気 を捉えた因子」	ある	28	11.8	1.73	
	どちらともいえない	5	12.2	3.49	
	ない	2	10.5	3.54	
子どもに接することへの不安		n	M	SD	
「子どもとの接触願望 に関連する因子」	ある	15	48.5	12.42	
	どちらともいえない	9	55.8	3.67	
	ない	11	52.6	8.3	
「子どもの内的側面に 関連する因子」	ある	15	48.7	5.91	
	どちらともいえない	9	50.9	5.93	
	ない	11	48.6	7.23	
「子どもの外観に 関連する因子」	ある	15	22.7	4.46	
	どちらともいえない	9	21.7	4.39	
	ない	11	23.8	3.06	
「子どものもつ雰囲気 を捉えた因子」	ある	15	11.6	1.88	
	どちらともいえない	9	11.3	1.94	
	ない	11	12.3	2.49	

一元配置分散分析

*** $p<0.001$

表 6 因子分析の各因子と学生の背景との関連

	子どもとの接触体験	
	弟妹	甥姪
	あり (n=4) なし (n=31)	あり (n=4) なし (n=31)
「子どもとの接触願望に関連する因子」	あり<なし*	あり>なし***
「子どもの内的側面に関連する因子」		
「子どもの外観に関連する因子」		
「子どものもつ雰囲気をつえた因子」		あり>なし***
t 検定	*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001	

VI. 考 察

1. 因子分析結果から見る学生がもつ子どものイメージ

子どもに対するイメージ 28 項目の形容詞対を因子分析した結果、『子どもとの接触願望』『子どもの内的側面に関連しているもの』『子どもの外観に関連するもの』『子どものもつ雰囲気を捉えたもの』という 4 つの因子が抽出された。これらの結果から、学生は子どもを内的側面・外的側面・雰囲気という子ども自身が持っているものと、子どもとの接触願望という学生が関わる対象として子どもを肯定的に捉えていることがわかる。

これらの因子分析の結果は、高橋ら(2000)が行った研究結果とほぼ一致しており、本研究の対象学生も小児看護学の授業を受ける以前から子どもに対して比較的肯定的なイメージを持っていることが伺える。これらの肯定的なイメージを持ち続けながら、実際の子どものギャップを埋めていけるような小児看護学の授業・実習の中でのサポートが必要であると考ええる。

2. 学生の背景による子どものイメージの比較

学生のもつ子どものイメージと、学生の背景との関連がみられたものは少なかった。調査当初、社会人学生の増加に伴い、社会的経験の中で自身の育児経験も含めて子どもと接する機会が増えることで、子どもへの肯定的なイメージが高くなるのではと予測したが、子どものイメージと学生の年齢や職業経験の有無との関連はみられなかった。その理由としては、晩婚化の影響から年齢は重ねていても婚姻経験や育児経験があるとは限らないことや、就業経験があっても子どもと接する機会のない職業であったことなどが考えられる。

子どもへの関心や子どもの世話への関心と子どものイメージとの関連についての結果から、子どもへの関心や世話への関心があることが、学生が子どもに対して肯定的なイメージを持つことに繋がる事が考えられる。特に、子どもへの関心や子どもの世話への関心が高いことが『子どもとの接触願望に関する因子』が高いことにつながっていたため、学生に「子どもは面白い、もっと知りたい」など関心を持たせることや、「子どもの世話はこんな工夫が楽しい」など関心を持たせることで、子ども

に対し「近づきたい」と思わせるイメージを持たせることができると考える。

また、学生の背景から、自分自身の同胞数は少なく、身近に関われる子どもも少なく、むしろボランティア活動や職業体験など学生の血縁関係から遠いところでの子どもとの関わりが多いことも明らかとなった。

関わった子どもとの関係について、弟妹のような非常に身近な子どもとの接触で『子どもの内的側面に関する因子』が低かったことは、弟妹との接触経験はむしろ子どもの内面の否定的なイメージが増すことが示唆される。甥姪との接触体験があることで『子どもの内的側面に関する因子』や『子どものもつ雰囲気をつえた因子』が高かったことから、甥姪のような学生には直接育児の責任がなくやや身近でない子どもとの一時的な接触では、「可愛い」「面白い」「楽しい」など子どものよい印象だけが残っている可能性があると考えられる。逆に弟妹など非常に身近な子どもとの接触は、一緒に生活する中で自分と利害関係が絡む事態も発生するため、「嘘つき」「作為的」「憎い」など必ずしも肯定的なイメージだけではないのかもしれないと予測される。

3. 小児看護学の授業や実習の方向性

以上の調査結果から、小児看護学の授業内容や方法について、いくつかの示唆を得ることができた。

学内での授業においては、和田(2005)が「幼児に対するイメージを形成するためにビデオ教材は擬体験として有効である。」と述べていることを踏まえ、①子どもへの関心や世話への関心を持たせるために視聴覚教材を使用し、早期から子どもに対してのイメージを持てるようにする、②親や周囲の人から話を聞きながら学生自身の生い立ちを振り返らせることにより、授業で学習したことを自分に置き換えてイメージさせるようにする、③グループワーク等を行う際は、学生の年齢や子どもとの接触体験などの背景を考慮してグループを編成し子どもへの理解を深めるように配慮する、ことが必要である。

また、実習や演習では、①授業の初期の段階から演習を取り入れ、授業や授業時間外(知人の協力やボランティア活動など)で実際の子どものと触れ合う機会を増やす、②保育所実習で実際の子どもの成長発達や子どもを取り巻く人々(親や保育士など)の子どもへの接し方、子どもに対する思いを学ぶ機会とする、などの方向性が考えられる。

VII. 結 論

1. 看護学生のもつ子どものイメージは、全体的に肯定的なものであり、因子分析の結果から抽出された子どものイメージは『子どもとの接触願望に関連する因子』『子どもの外観に関連する因子』『子どもの内的側面に関連する因子』『子どものもつ雰囲気をつえた因子』であった。
2. 子どもへの関心や子どもの世話への関心がある学生の方が、子どもに肯定的なイメージをもつ傾向があった。特に、子どもとの接触願望に関連する因子において、子どもへの関心や子どもの世話への関心がある学生は関心がない学生よりも有意に高かった。
3. 学生の性別や年齢、就業経験、子どもとの接触体験と、子どものイメージ総得点との関連は見ら

れなかった。

4. 小児看護学の授業では、①子どものイメージ形成を促すのに有効な視聴覚教材を使用する、②学生自身の生い立ちを振り返らせる、③グループワークの際には学生の背景を考慮すること、が考えられた。また実習や演習では、①授業の早期から実際の子どもと触れ合う機会を促す、②保育所実習で実際の子どもの成長発達や周囲の人の接し方を学ぶ機会とする、が示唆された。

文 献

- 市川正人, 細野恵子, 上野美代子(2009). 看護学生と他学科学生の乳幼児に対するイメージの比較. 名寄市立大学紀要, 3, 87-92.
- 今村実樹, 芦江恵理子, 古賀菜々美, 川村紗奈美, 廣渡加奈子, 中村恵美(2011). 小児看護学実習において看護学生が感じた困難に対する要因(第1報). 産業医科大学雑誌, 33(1), 94.
- 上山和子(1999). 看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について. 新見公立短期大学紀要, 20, 125-133.
- 内田雅代, 古谷佳由理, 兼松百合子, 中村美保(1993). 小児看護実習における学生のこどもに対するイメージの変化について. 千葉大学看護学部紀要, 15, 35-43.
- 末永香, 竹田貴子(2012). 看護学生のもつ入学時の子どものイメージ-学生の背景や子どもとの接触体験による違い-. 第30回千葉県看護研究学会集録, 社団法人 千葉県看護協会, 125-127.
- 高橋由起子, 杉浦浩子, 竹内淑子(2000). 看護学生の子どもに対するイメージと関連要因-学生の背景による比較-. 岐阜大学医療技術短期大学部紀要, 7, 21-31.
- 中嶋一恵, 中淑子, 林田りか, 宮下弘子, 森藤香奈子, 山下智美, 本多直子(2005). 小児看護学初学者が子どもに抱くイメージの構造. 長崎県立シーボルト大学看護栄養学部紀要, 6, 49-58.
- 最上玲子, 佐藤邦枝(1998). 本学学生がこどもに対して持つイメージとその学年間比較. 岩手女子看護短期大学紀要, 6, 17-25.
- 文部科学省(2000). 中央教育審議会報告: 少子化と教育について.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/000401.htm, April, 2000
- 山中久美子, 吉川彰二, 永島すえみ(2003). 本学学生の子どもへの関心と子どもの理解の変化: 小児看護学の講義前と実習後の質問紙による比較から. 大阪府立看護大学紀要, 9(1), 15-23.
- 和田久美子(2005). ビデオの内容が幼児に対するイメージ形成に及ぼす影響. 日本小児看護学会誌, 14(2), 23-29.

Factors Affecting Changing Nursing Student Perceptions Toward Children

Kaori Suenaga, Shizuka Nakayama

Abstract

The purpose of this study was to explore factors related to the perception of children by nursing students in a three-year nursing school. Thirty-eight student nurses from a three-year nursing school in Chiba City participated and completed the questionnaire about their perception of children before beginning lectures on pediatric nursing. Student nurses' perceptions were measured using twenty-eight items ranked with the seven-point Likert scale. Socio-demographic data were also investigated. The data were analyzed using statistical methods. Four factors emerged from the results of exploratory factor analysis. The nursing students have an affirmative perception of children. Findings indicated that more positive perceptions were related to the higher levels of concern about children or higher levels of concern about nurturing and childcare. These results suggested the necessity of increasing practical use of audiovisual education aids and the opportunity for their use in examining real children in society in lectures and of child care studies designed to stimulate student interest about children and childcare.

Key words: children, image, nursing student, factor